守護神ゴーレス

第10話
『建国記念日』
WATCHER OF THE SKIES
前編

作：みかつきなお

絵：ぜんざいナオミ

守護神ゴーレス第10話
『建国記念日』
Watcher of the skies 前編

みかつきなお

人工知能

白い小型機械の連結により、後部に脳のような形状が現れたトロイ＝プリマス製≪バッファロー≫天空1号は、不気味な沈黙を示していた。

辰巳と小雪は天空1号の作業状況を新しいものに書き換える作業を続けた。

「小雪、天空1号は自立系制御系ともに乗っ取られたのか」

「そう、しかもアルツハイマー病治療のための外部思考サポート擬似生体CPUと同じ作業をしているわね」

「完全に脳を形成してしまったのか」

うごめく脳を見た舜とみずき

「みずき、さっき聞こえたんだろ。天空1号の声」

「うん、『きつい』と言ってた声が聞こえなくなってきた。『虫』のつぶやきが聞こえる」

「あの気持ちの悪い集合体は、意思を持っているのか？」

「うーん。電気的にも精神的にも見える」

舜とみずきの通信に割って入った裕一は怒鳴る。

「そんな禅問答はどうでもいい、敵を見逃した。奴の目的はわからない、でも俺達は戦わなくちゃいけない、みんな必死でいけ！」

「わかった社長！……で、裕一。作戦をどうするの。」

「だからよー……。（そういわれても……）」裕一は答えに困った。代わって辰巳が答える。

「あの脳から発せられるデータを画面に出す。やつは那覇のデータをネットで収集している。」

古い那覇の写真、そして何処かの家族の写真を中心にその関連キーワードから導きだされた情報を収集している。イメージ画像としてキーとなる写真を中心に周囲をいくつものテキストと画像が飛び交っている。

赤い非常用ライトのついたコクピットからライブフォン画像が割り込んできた。

「これは私の家族。戦後まちぐゎーで商売していた我が家の記録だ。そしてこの山に安慶名家の墓があった。」

安慶名が頭を押さえながら語った。みずきが答える。
「安慶名さん、大丈夫ですか？」
「あー、気を失ったみたいだけど大丈夫よ。これはまるで私の思い出をたどっているみたいだ。なんでかね。」
「安慶名さんの脳波データから読み取れるキーワードを手始めに検索を続けているんだわ。安慶名さん、問いかけて飼い主の言うことを聞いて欲しいと言って。乱暴はやめてと……。」
「わかった。やってみるさ。」

天空1号VS兼光

突然人工音声がネット上に響いてきた。
各メディアにもその音声は一斉送信された。
＜私は天空1号の頭脳だ。兼光社長いるか？　開発を即時中止せよ。この牧志の墓地一帯を壊すのはやめろ。＞
この呼びかけに兼光のイヒカは近づいてきて問いかけた。
「兼光だ。天空1号くん、墓地を壊さないと約束するなら君は暴走をしないと約束できるかね。」
＜約束しよう。＞
「墓地を壊さなくても周辺を整備できる。私は約束する。では操縦を安慶名さんに返してもらえるか。」
＜マスターである安慶名に操縦を返したら私はどうなる。＞
「まあ、なにもしないでくれればいいのだが。」
＜破壊する気だろう。＞
「そんなことはない。」
＜兼光氏の呼吸と発言のバランスは嘘を示している。あんたバレバレなんだよ。正統防衛を開始する。＞
天空1号は国際通り東側に向かった。東の安里側に立っているイヒカに向かって天空1号は走りだした。
突然のダッシュにイヒカは左足に直撃を受けた。
てんぶす前広場で踵を返して天空1号はまたイヒカを狙った。
「やめなさい天空1号、あんたは聞き分けのない子だったかね。」
＜我がマスターである安慶名さん、私は82年、アクチュエーターパワーショベルの作業記録として生まれて以来あなたの意思を具現化してきた。今日はあなたの意思を汲み取った。思い出のある街を壊したくないという気持ちだ。＞

「それはだれにでもあるだろう。仕事だからやってるわけさー。」

∧わたしはこれが仕事だ。兼光が悪いのだ！∨

天空1号は突進した。イヒカは立ち上がって正面から来る天空1号の顔を押さえようとしたが、前後する突きを繰り返された。

「いまのうちだ。後ろを攻めます、鵜飼さん船越さん、ワイヤーガンの連射で足に絡めてください。」

「あいよ、少年！」

舜の呼びかけに鵜飼らがワイヤーガンを連射し、足に十本ほど絡みついた。ゴーレスはそのワイヤーの端をつかんで天空1号をひっぱった。

イヒカはその加熱フォークの熱を受けて装甲板に所々傷が付いてきた。

∧那覇と沖縄の自然を守るために桐丸重工の横暴を許さない。全計画を停止せよ。私は沖縄の守護者だ。∨

「だんだん要求が大きくなるな、やりたいだけ俺を攻めろ。」

前輪と後ろ足の前後する動きでまだまだ突きをやめなかった。

みずきが防壁の横から現れた。

「またみずき危ないところにでてきて！」

裕一は舌打ちした。

「お前は守護神ではない。那覇の守護神のフリをするな。」

∧私はその意思で那覇を守るのだ。∨

「お前の意思は本当の意思ではない。誰かが仕組んだのだ。誰かが騒ぎを大きくする目的でお前は利用されている。ネットの配信もやめなさい。」

アジテート電波

天空1号は多くの県内サーバーを占拠しはじめ、那覇の古きよき風景とそれに不似合いな桐丸重工批判、自然保護のアジテートを県民に配信している。

地上波デジタルも次第に占拠されはじめた。

裕一は状況を確認しながら疑問に思った。

仕掛けた渚岐は何を考えてる？　なんのために？　裕一は若干謎めいた行動の疑問を考えた。

あの円盤があまり役に立っていない。ハンドマンに対する自立系のハッキングも中途半端だ。

あれはハンドマンの作業を遅らせるためのもので、天空

1号の作業を目立たせるためのものか。
そして自然を守ろうとアジテートしている。
懐かしいものを提示して単純な呼びかけに同意する心。
裕一はウォドパネルを見た。小さな同心円が数え切れないほど浮かびあがっている。
みんながエキサイティングしている、気分が高揚している。この状況、このショーが目的なのか？
「舜、早く終わらせたほうがいい。なにかうさんくさいんだ。」

捕縛作戦

兼光がここにいる一同の画面に現れた。
「作戦の準備ができた。沖映通りとパラダイス通りとの交差点手前まであいつを引き寄せるんだ。落とし穴を作る。」
ワイヤーガンが多数打ち込まれて、数十本のワイヤーをそれぞれのアクチュエーターが持った。

農連市場のイカ

その少し前、開南の農連市場ではトラックから大量の機械が荷おろしされた。
市場のオバーたちは目をまるくした。
「ここは農連市場なのにこんなにまぎさぬ（大きい）イカを持ってきていいのかねえ。」
桐丸重工のトラックから降ろされた体長７０㎝のイカ形自動機械（オートマトン）『スクイード』約１００体はガーブ川に投下され、暗渠を下流へと向かっていった。ダイナマイトを装備されて。

測定結果

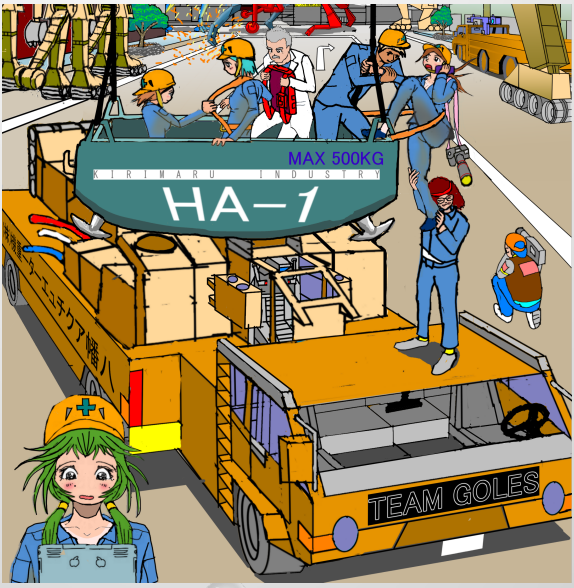
津堅島のニューロコンピューティング研究所から指揮車の裕一たちに通信が繋がった。
「ニューロ研の桜です。オノゴロの計測状況を伝えます。全沖縄に人為的ウォード粒子が派生。そして先ほどオノゴロがunknownと返答した新種のウォードがおそらく天空１号の脳。そしてウォード粒子の流れがこうよ。」
桜の声とともにモニターに現れたCGは国際通りの衛星画像にワイヤーフレームで作られた天空１号に向かって向かって集束されてゆく全沖縄の粒子の流れが写しだされ

た。
「これは……！」
裕一、辰巳、小雪は初めて見たこの流れに驚いた。
「うちの研究所では『災害型』と呼んでいる傾向の極端に人為的な例といえるわ。『震源』に対する集合無意識がそうさせる現象。あくまでいま思いついた仮説ね。」
「桜。これを何かの儀式に変えようとしている人物を見つけた。人間のウォードは確認できないの？」
「そういえば不思議な波があったよ。脳波の『パケット通信』を行っているような波があった。」
裕一は思い出した。みずきが感じた外側だけで中身のない反応。あの渚岐が送っていたのか？
「あの脳の実体ではなくウォードの収集されたものが重要だ！　小雪さん辰巳さんデータをとっておいて！」
裕一は携帯片手に飛び出した。

救出方法

完全に拘束された天空1号の前輪をイヒカのステイクドライバーが貫いた。
行動を制御された天空1号は数十台のアクチュエーター機によって沖映通りに引きずられていった。
イヒカによって後ろ足を拘束された姿はある意味痛々しかった。
「兼光さん、中の安慶名さんの救出はどうする。」
「今一番精度の高い仕事が行えるのはお前達チームだ。今ゴンドラが降りてきただろ、これで一端浮遊してハッチをこじあけて欲しい。」
「僕らが？」
「状況を打開できるのは君らだけだよ。私は手を外すわけにも作戦を指揮しなければいけない。」
「わかりましたよ製作総指揮さま。」
「私が行くわ。」
通信にみずきが割って入った。
「みずき、お願いする。同情に惑わされるな。」
（……安慶名さんは大丈夫だろうけど、人間のような感情を見せられては同情するよな。）
舜は同情しながら天空1号の脳のようなコブを見た。
あれは作られた言葉だ。同情を誘うための。
「舜、あれはやはり仕組まれたのだ。ウォードの流れを集めるための機械なのだ。」
舜は下で携帯片手に見上げる裕一の熱気を感じた。

「わかった裕一、ウォードの流れを断ち切る。」
「裕一、舜。天空1号では人工知能だけではない。魂が作られている。魂を私は引き出す。手伝って。」
「了解！」



＜私は破壊されるのか？　わがマスター安慶名＞
「天空1号の声が聞けて私はよかった、暴れた牛は処分されてもしかたないからねえ。」
安慶名はためいきをついた。
＜あなたの気持ちは『空しい』、もしくは『悲しい』と

いうことか。それが。∨
「『ちむぐるさ』だねえ。お前が悲しいことは、私も悲しいよ」
　∧私は破壊を拒否しているのだ。人間の悲しいとは、違う∨
　みずきがコックピットの画面に割って入った。
「安慶名さん、説得を続けて。今から救出に行きます。天空1号よ、お前から『魂』を取り出す」
「え？　たましい、マブイね？」
　天空1号の角を掴んでいるゴーレスを横目に、ゴンドラに乗ったみずきは天空1号の真上で降下を始めた。着地したところでみずきのインカムに舜は伝えた。
「みずき、安慶名さんを無事に出すことがメインだ。天空1号の魂は2番目の仕事だよ」
「わかっているわ、『魂』は簡単に破壊できない。引き出すしかない」
「わかった。よし、作戦開始だ」
　交差点近くで停止した天空1号は揺れている。揺れる背中に乗ったみずきは腹這いになりながらドアに進む。
　グラッと背中が傾いた。
「きゃっ！」
　みずきは落ちそうになった。
「みずき！」
　舜は叫んだが、みずきは搭乗用のパイプ階段にしがみつき事なきを得た。みずきはワイヤー付き安全フックをパイプに取り付けるとまた背中にしがみつきドアロックに向かった。
　舜はみずきの冷静さに安心した
　重いドアノブを回転させてこじ開けると安慶名が上を向き、手を上げて合図をした。
　みずきのゴンドラが揺れながら横につけてゴンドラの安全ワイヤーをたぐって上ってきた安慶名は中に入った。
　入れ替わるようにみずきが中に入った。
「みずき、早く出ろよ」
　舜は天空1号内のカメラから状況を確認した。

つづく